サッシビチャリ川 P 1839南面直登沢

神威山荘～サッシビチャリ川 P 1839南面直登沢～ヤオロマップ岳～コイカク夏尾根

2012年8月2～5日

L金澤弘明 栗山靖人 福家大三

P1839m南面は栗山が以前から行ってみたいと希望していたものだった。神威山荘からの入下山は、ヤオロ付近の稜線からサッシビかペテガリ西尾根を下降するとなると1日で神威山荘まで到着するのは無理で、最も容易な下降路であるコイカク夏尾根を下る計画で実施した。しかし、今年は札内側の道路が雪崩による橋桁の損傷で札内ダムから上流が車両通行止めとなり下山時、余分に歩かなければならない状況だった。

8月2日

夜8時、中札内の道の駅で栗山・福家と合流する。下山用に福家車を札内ダム脇にデポした後、天馬街道経由で神威山荘に向かう。渡邊Pは約1時間先行しているはずだったが、山荘の少し手前で渡邊車に追いつき、深夜12時に神威山荘に到着した。

8月3日

早立ちでペテガリ沢へ向かう渡邊Pをベッピリガイ乗越し入り口まで車で送り、再び神威山荘に戻ってから中年パーティーもゆるゆると出発準備を始める。

ベッピリガイ乗越しの神威側は良く踏まれてはいるものの、数年前に比べ少し荒れた感じだったが、ペテガリ側の林道は最近大掛かりに整備されたようきれいになっていた。ペテガリ山荘で大休止してからサッシビチャリ川に向け再出発する。サッシビ出合いまでは40分ほど、そのまま左岸の林道跡を進みCo380mで入渓する。

入渓してすぐの函は右岸を巻くが、ツベツネの時には明瞭だったはずの巻き道の入り口が分からなくなっていたし、記憶にあるよりずっと高く大きく巻くので「記憶ってのはアテにならないものだな」と思う。ここは左岸巻きが正解のようだ。続く第二の函は左の小沢状から簡単に乗越し、あとは西沢出合いを経て直登沢出合いまで淡々と河原を歩くのみとなる。時折雨がパラつくものの大きく崩れることはなさそう。

出合いの対岸に良い場所があり、少し整地してテントを張る。流木は乾いていてすぐに焚火もおきて、福家さんが大量に薪を運んでくる。どうやら雨はあがったようだ。

出発 07:35-08:35 乗越し-10:20 ペテガリ山荘 10:50-11:50 入渓-15:45南面直登沢出合

8月4日

Co640m手前からの土砂に汚れた雪渓を過ぎるとほどなく沢は函状を呈してくる。滝は2～4m程度だがスラブ状の岩盤に囲まれた釜や瀧を持ち、深く水に浸かる場面が連続する。「いかに濡れないか」をモットーとし、泳ぐよりヘツリを選ぶおじさんパーティーとは言え、これはさすがに中を行かざるを得ないが、幸い水は冷たくない。

左股沢との680m上二股を過ぎ、Co750m付近の釜持ち2mは右岸から高巻き10mの懸垂で沢身に降りる。すぐ上には雪渓があるらしく、冷気が流れ下って震えるほ

どに寒い。雪渓はCo800近くまで続いていた。810m二股は15m程の垂滝となっている右股が本流だ。右岸の草付き壁をよじ登りトラバース気味に沢に下る。ここから両岸が岩壁で直線的な函の中に切れ切れの雪渓が現れ、崩壊後まもない感じのブロックの間を進んだりしていくと1030m二股となる。

正面は左岸が大きな岩壁になった顕著なガレ沢となっていて、目指す本流はその左岸垂壁から落ちてくる。水量が少ないせいか迫力に欠けるが「やっぱりこれだよなあ」といった感じ。滝は4段30m位ほどで水流右岸（上流側）を直登する。この辺りから水流が岩の節理に沿って流れている感じに変わり、岩質も少し脆くなってくるようだ。

大きな岩盤の滑滝を越えていきスノーブリッジをくぐるとCo1120mである。正面から右方にかけては大きな岩壁に囲まれ行き詰る。左岸から細かい流れが落ちてきてこれが本流である。上流側の岩壁から登るとその先は5~10m位のチムニー状の滝が連続する。これらの多くは難しくはないが微妙にヌメっていたりホールドが浮いていたりで妙に登りづらいものが多い。3段ほどになったチムニー滝の2段目8mは抜け口が悪く、2番手で進む福家さんがスリップし、数m滑落する。「あっ!」という栗の声に振る返ると、しんがりのはずの栗が福家さんの体の上になって落ちていて、一見してあまり良い落ち方でなく心配だ。「大丈夫か」と声をかけるとすぐに返事あり。福家さんが膝に傷を受け流血するも応急措置で何とか続行できそうでホッとす。ここは確保のため上からロープを下ろす。

続く3段目5mはロープをつけた福家さんにそのまま左岸脇から行ってもらったが、見た目に反して悪く行き詰ったしまう。福家さんにはテラスで待機してもらい、金澤が水流の中を行き上から確保する。下から見ると何てことはなさそうなのだが、ホールドが全て外傾し左岸はどうも登れそうにない。福家さんに無茶をさせてしまったなあと反省する。やはり怪しいところはロープを出して正攻法で行くべきだな・・・

Co1190m付近から一旦右股を進み、数mの藪漕ぎをして左股に乗越すが水流沿いは何とも登りづらく、左股左岸の小さなブッシュのリッジに転進する。チムニー状12mの垂滝は栗がトライカムを決めながら空身でリードし、上部は右岸の壁をトラバース気味に落ち口へ。福家さんがフォローしザック3個吊り上げる。

小滝をどんどん登っていくと1490m付近で小さな股に出る。右は土壁になって行き詰まりそうに見えるので左をとるが、間もなくブッシュが濃くなりだした。見ると右は土壁の上から顕著な沢形が復活しているようなので、藪漕ぎトラバースして右股へ戻る。灌木のトンネルを進んで行くと稜線直下で沢形が失われ藪漕ぎとなる。

稜線までの藪漕ぎはほんの40~50mほどで、なるほど先人の記述通り「ほぼ藪漕ぎ無し」と言っても良いかもしれないが、その短い藪はかなり強烈であったから「なにが藪漕ぎ無しなんだよ!」との記述もまた正しいとも言えそうだ。前衛峰とのコルに飛び出し、雲中の頂上へは20分ほどだった。

夜半から寝ていて暑いくらいに気温が上がり、時折強い雨が通り過ぎるものの比較的快適なキャンプであった。

出発 05 : 15 - 07 : 00 810m二股 - 15 : 40 稜線 - 16 : 10 P1839m

8月5日

朝、雨はほぼ止んでいるが風もあるので雨具を着て出発する。ヤオロまでの稜線はしっかり踏み跡があり、かつてほとんど木登り状態で稜線を渡って行ったあの苦

労が嘘のようだ。1781mを過ぎヤオロに近づくにつれ風が強くなり、時々煽られそうになる。風を避けて休めるところが無く、ようやくヤオロの窓で一息つけた。ここからコイカクへの最後の登りは標高差160mほどでしかないが、疲れた身体にはやけに大きな登りに感じる。夏Pで各Pの動向をチェックしつつ、一休みしてから急な夏尾根の下降にかかる。Co1305のテン場でまた一休みし、上二股へ下りついてまたまた軽く一休み、なんか昨日から休んでばかりだな。

「コイカクシュサツナイ川は流れが変わるほど荒れている」との話は聞いていたが、確かにこれはひどい。河原は支流からの土砂崩れや底雪崩にやられたと思しき大量の流倒木に埋め尽くされ、あの単調ながらもどこか牧歌的な美しささえあった広い河原風景は全く失われてしまっていた。昔日の姿を取り戻すには何十年もの長い月日が必要になることだろう。

舗装路に出て靴を履き替え、車の来ない道々の八つの橋、七つのトンネルを黙々と歩き札内ダム脇の車デポへ。中の岳から下山する渡邊Pが入山時に使用した金澤車を荻伏駅まで下げてくれることになっていて、再び天馬街道を越えていく。

出発 06:10-08:10 ヤオロマップ岳-09:30 窓-10:30 コイカク夏P 10:50-13:00 上二股-15:00 コイカク出合い-16:20 札内ダム車デポ

参考グレード サッシビチャリ川P1839m南面右股直登沢 4級下

北日高の残雪量と比較して、中・南は同時期としてはむしろ少ないくらいだったようだ。またここまでまとまった降雨が無く水量も明らかに少なかった。「取りたてて困難な部分」というのは無いが微妙に登りづらい滝が連続し、上部の二股などのように岩盤の節理に影響されたと思われる曖昧で読みづらい地形が何箇所かあって読図も難しく!!! 沢にふさわしい内容のある良溪であると思う。

今山行では神威山荘から入山し、遡行後はP1839mからヤオロ・コイカクへ縦走し、下降路を一般道に求めたが、道々部分の不通の影響もあって、2万5千分の1地形図4枚にわたる長行程の山行となった。

(金澤弘明)